

ある江戸人の異文化理解(二)

Crossing Cultures in the *Edo* Era.

佐羽淡齋(一七七二～一八二五)の総宜楼の詩碑をめぐって

An Examination of *Sougiro*, a poem written in classical Chinese by Tansai Saba (1772~1825)

新谷 雅樹

SHINYA Masaki

一

2011年3月に、『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』の創刊号がめでたく刊行された。その節、私は「ある江戸人の異文化理解(一)」¹を寄稿した。「異文化理解」なんぞと簡単に口にしたが、私の片々たる一篇の論述で、異文化理解が可能だというのも烏滸がましい。それで、当初から連載という形式を採るつもりだったが、去年度の創刊号から今年度の第二号までは、一年の時間的開きがあるので、まず前号のおさらいから始めておこう。

江戸の昔、明の渡来僧・東臯心越禅師が能見堂巡錫のおり、本堂から眺めた景色が中国湖南省の瀟湘八景(古来より中国では画題・詩題として著名)の風光に似ているとして、「洲崎晴嵐」、「瀬戸秋月」、「小泉夜雨」、「乙艦帰帆」、「称名晩鐘」、「平瀉落雁」、「内川暮雪」、「野島夕照」²という八勝の準擬をなすとともに、その八詠を賦した。心越禅師といえ、わが国に篆刻の技法や古琴の奏法を伝えたというほどの、すこぶる博識碩徳の文人僧で、禅師の日本亡命をいち早く知った水戸光圀卿の手厚い庇護と深い尊崇を受けた。

この能見堂巡錫の故事は後々まで文雅の語り草として伝承され、東の金沢八景は西の近江八景と並ぶほどの声名を馳せるようになり、関東では「金沢」といえば、加賀の「金沢」のことではなく、武州の「金沢」のこと、いや、一々「武州」の「武蔵」と断るまでもなかったという。このことは鐮木清方の随筆³で知ったことで、余所者の私はずっと、金沢八景は「相州」の地であると思いこんでいた。いや、私ばかりではない、根生いの浜っ子でさえ、金沢八景は—武蔵の国ではなく—相模の国に属すると思っている人が少なくない。

だいいち『新編鎌倉志』⁴(貞享二年=1685 刊。心越禅師も序を書いている)の凡例にも、こう書いている。

「一 金沢者、武州六浦荘、而非相州鎌倉郡、然昔平実時・顕時等居此以降、実如一郷、且地理相接景勝秀美、間人墨客過鎌倉、以遊金沢為壯観、故今併記、共曰鎌倉志」

こういう断り書きをわざわざ付記するところをみると、このころから金沢は武州か相州か混同される嫌いがあつたらしい。もっと言えば、ほとんど相州鎌倉と同一視されていた節があつたようである。無理もない、お互いに咫尺の間にあり、行人舟車の往来、織るがごとしという土地柄だったからである。十返舎一九が書いたように、「金沢ハ六浦庄のうちにして、瀬戸橋より東をいふ」⁵といった程度のさして広くもない領

域で(ほぼ現在の横浜市金沢区に相当する)、六浦一帯が江戸中期から米倉氏の封地となって以来、武蔵の国ということになった。その後、ことさら「武州金沢」「武陽金沢」「武昌金沢」⁶「武劬金沢(劬=州)」などと唐めいて呼ぶのは、国学者なら「漢意のねじけたる」言い回しだと難じたことだろう。要するに金沢は、相模の国の中にある武蔵の国の飛び地だったわけで、米倉氏は今の横浜市内に於いて唯一のお大名だったという。

言うもおろかなことながら、わが金沢八景は本場の瀟湘八景の雄大さにはおよぶべくもない。しかし、ここが天下の勝区であることは鎌倉の昔から認められていた。

「見しハ。今愚老。武州むつらの。海辺を一見せしに。山海の風景。比類なかりけり。昔。鎌倉將軍。御遊覧のため。此六浦へ出御し給ひ。相州武劬をはじめ。各々御伴にて。御舟にめされ。海上にてくわんげん。詩歌。連歌の御遊興。古記にみえたるも。思ひ出られたり。」⁷

というほど將軍御一統が風流三昧にふけるにふさわしい遊覧地であつたらしい。

爾来、時代が移っても、金沢の山海が勝概であることに変わりはなかった。これは江戸時代のものだが、以前、『金沢八景案内子』(慶應義塾大学図書館蔵)⁸という仮綴和装の冊子(五丁)を見たことがある。地味な墨刷り本ながら、今でいう観光案内パフレットの体裁に似ている。本書は管見のおよぶかぎり、類書中では最も古いものに属し、

「天明甲辰秋七月擲筆山地蔵院現住来仙再刻」

という刊記をもつ(天明四年=1784)。

「再刻」とあるからには「初刻」があるはずだが、残念ながら未見である。非常に珍しいものなので、長くなるが、以下、全文をここに再現する⁹。(漢字は一部をのぞき現代通行体にあらため、漢詩は訓点を省いた。また仮名遣いは旧仮名のまま、仮名遣いの誤りと思われるものもそのままとした。なお踊り字の「くの字点」はワードプロセッサの横書きに不似合いなものであるため、もとの字に直した。角書きは「/」で分けた。以下同じ)

(表紙 版)

金沢ノ八景 案内子¹⁰

(表紙裏 白)

(本文 版 句点原文通り)

(一才)

月岡ノ蔵書¹¹ 金沢八景 江都 十寸見蘭尔述¹²

奚そ武蔵の六浦の庄。四石八木数数の。多き
詠めに金沢や。筆も及ばぬ。八の景。東を遙に
見渡せハ。海漫漫と際もなく。釣する舟の浪分けて。
妻も乙鞆帰る帆に。家路へ急くかつきの業。世渡る
業のこと繁く。色色種に替れ共、恋ハ隔てぬ中垣や。
賤かふせやも一すじに。君小泉の夜の雨。濡れてしのべは

(一ウ)

浜風に。裾や小褌ハひらりひらりひらりと平潟に。
 落る^{かりが子}雁面白や。頃しもけふは仲秋の。しかも望^{もち}にて
 さむらへバ。詠めハ瀬戸の秋の月。仰ぎ三島の御社や。朱^{あけ}の
 玉垣色添て。野島の夕照夕づく日。笠かたむけて遠近の。
 道行く人ハおのつから。画くかごとにありありと。見へつも
 又はかくれつも。洲崎の晴嵐是ぞかし。こなたに茂るハ内川の。
 暮雪の景としろしめせ。はや黄昏^{たそがれ}の鯨音ハこれ。

(二オ)

称名寺の晩鐘なり。扱八木と申るハかのもろこしの
 勝景^{せうけい}の名にしをいたる西湖梅。匂ひも花も外ならで
 一ト木にこもる桜梅。名のミ残りし黒梅に。枝葉栄へて
 千代の声。雀か浦の一ツ松。同じ非情^きの樹なれ共。怖^{おそろ}しき名の
 蛇混^{じやびやくじん}柏。和歌の徳にて色染ぬ。青葉の楓青丹よし。奈良の
 桜に気をされぬ。文殊普賢の二タ本ハ。飛花落葉の
 有様に。無常を示す法の場。まつた四石の其内に。

(二ウ)

美女石。姥石二つは是。人生の盛衰を。不朽の石に。なぞら
 へて。末世にのこすためしとかや。次になたゝる飛石ハ。仏神応護
 の力にて。ふしぎ^{かたち}の象を顕せり。扱福石と呼ぶ故ハ。此枇杷島に
 立給ふ。弁財天の誓^{ちか}にて。国土の衆生に幸福を。施し給ふ奇瑞なり。
 其外数多の名所ハ。具^{つぶさ}に語りも尽されず。かゝる無双の絶景を。
 洩さず眼下に備ふる事。能見堂の名にめでゝ。よく見給へや旅人と
 言葉艶して案内子ハ。おしへてこそハ帰りけれ。 彫工中出斗^印

(三オ)

能見堂八景

洲崎晴嵐 心越禅師

滔々驟浪斂余暉滾々狂波遶竹扉市後

日斜人静悄行雲流水自依依。

無生居士

にきはへるすゝきの里のあさけふり

はるゝあらしにたてる市人

瀬戸秋月

(三ウ)

青瀬涓々不繫舟風伝虚籟正中秋広寒
桂子香飄処共看氷輪島際浮
よるなみの瀬戸の秋風小夜ふけて
千里の沖にすめるつき影

小泉夜雨

暮雨凄凉夢亦驚甘泉汨々聴分明蓬窓
淹蹇無相識腸絶君山鉄笛声
かぢまくらとまもる雨も袖かけて

(四オ)

なみたふる江の昔をぞ思ふ

乙鱸帰帆

朝宗万派遠連天無恙輕帆掛日辺欸乃
高歌落雲外依稀数艇到洲前
沖つ舟ほのかにみしもとる櫂の
をともの浦にかへるゆふなみ

称名晚鐘

夙昔名藍成覚地華鐘晚扣若鯨音幽明

(四ウ)

聞者咸生悟一片迷離祇樹林
はるけしな山の名におふかね沢の
霧よりもるゝいりあひのこゑ

平潟落雁

列陣冲冥堪入塞菽蘆簫瑟幾成隊飛鳴
宿食恁棲遲千里伝書誰不愛
跡とむる真砂にもしの数そへて
しほの干潟に落る雁かね

(五オ)

野島夕照

独羨漁翁是作家持竿盪槳日西斜網得
魚来沽酒飲披蓑高臥任堪誇
夕日さす野島の浦にほすあみの
めならふ里のあまの家々

内川暮雪

広陌長堤竟没潜奇花六出似鋪縑渾然
玉砌山河色遍覆危峰露些尖

(五ウ)

木陰なく松にむれもれてくるゝとも
 いざしらゆきのみなと江のそら
 武州金沢擲筆山能見堂有瀟湘八景
 之風味因観鎌倉志甚詳耳一夕寥寥
 対青灯漫賦八景之陋句以識斯勝境
 云歳執徐正夏日東阜越杜多艸

天明甲辰秋七月擲筆山地蔵院現住来仙再刻

右の跋よると、禪師の「能見堂八景」八詠の作詩の動機はこうである。

「武州金沢擲筆山能見堂ハ、瀟湘八景ノ風味有り。因テ鎌倉志ヲ観ルニ、甚ダ詳ラカナルノミ。一夕、寥寥トシテ青灯ニ対シテ漫ロニ八景ノ陋句ヲ賦シ、以テ斯ノ勝境タルヲ識ルト云フ。歳、執徐ノ正夏ノ日。東阜越杜多艸」¹³

「執徐」とは辰年のこと。ここでは元禄元年(1688)にあたる。当年の夏日に、禪師は「能見堂八景」の詩賦の稿を起こしたというのである¹⁴。禪師は二十年の長きにわたって日本での亡命生活を余儀なくされたが、多数の詩書画をわが国に残し、和歌もたしなむほどの学僧であった。東夷の日本に馴染もう、馴染もうと努力したことは確かである。しかし「大明／方外／一人」¹⁵という印影を見たとき、私はと胸をつかれた。故国の「瀟湘八景の風味」を忘れかね、東夷の「金沢八景」にその面影をかさねて作詩するという心理の屈折を見たような気がしたからである。杉村英治氏が東阜心越の伝記を書いたとき、『望郷の詩僧』というタイトルをつけた所以であろう。

また後年——元禄元年(1688)以後～享保六年(1721)のいずれかの歳に——京極兵庫無生居士(万治元年生、享保六年卒。武人にして歌人)が、禪師の八景八詠の漢詩に八景八首の和歌を添えたということも、わが金沢八景の勝目を高からしめた。禪師の八詠は早く江戸の文墨界に知られたが、居士の八首も——なかなんぞ歌川広重の「金沢八景」(天保七年頃の作)の画中にも引用されたことによって——広く世に行われた¹⁶。

言うなれば、この二人の詩歌のおかげで、金沢八景の勝目はほとんど動かせぬ雅名となったわけで、禪師・居士のお墨付きが江戸時代の八景探勝に与えた影響は測り知れない。(念のため言い添えると、元来、金沢八景という地名はない。とくに京浜急行の駅名に使われたことによって、われわれの記憶に留まった)

たとえば、江戸の隠居僧・十方庵敬順の『遊歴雑記』「初編の上 五拾貳 能見堂の始元」¹⁷にも、こうある。

「……その後延宝の頃かとよ、水戸黄門光圀卿は、唐僧東阜心越禪師を具し此地に來りたまひ、唐土の西湖と沙汰する瀟湘八景に表どり、此地にも八景の地名及び四石八木の号と、八景の詩文七言絶句八首を作れり、後又京極兵庫無性居士の和歌八首を作り添てより、武州金沢八景の詩歌とてもてはやす事とはなりぬ、詩文八首は心越禪師の作たり、……」¹⁸

これによると、禪師・居士の合作ともいべき「武州金沢八景の詩歌」は、和漢朗詠の一種のスタイルと

して広く受け入れられたようである。そのゆかしい名勝賛美は、江戸の人々を金沢探勝へと駆り立てただろう。

ところで十方庵敬順は、文化・文政年間、気ままな隠居僧であつたらしく、しじゅう江戸近郊に出遊しては名勝古跡の見聞をまめまめしく記録しているが、とりわけ金沢八景は十方庵お気に入りの名所であつたようで、多く筆を費やしているの、以後、本書からの引用が増えるだろう。

二

さて、『遊歴雑記』のつづきを読もう。

「……然しより以来能見堂の名高く、四石八木の号及び八景の詩歌を、世に伝える事全く光心両哲の学解によるものなり、且能見堂をくんだりて金沢に止宿せんには、名主五郎右瀬戸橋あづまや安右橋本等をよしとす。」¹⁹

文化年間、まだ当地にはさしたる宿泊施設はなかったようで、「名主五郎右衛門」「瀬戸橋あづまや安右衛門」「橋本」宅に(後述)、一夜の宿を借りるといった程度のものであったらしい。

ここにいう「あづまや」とは、創刊号に掲載した『江戸名所図会』巻之二の「瀬戸橋」「其二／旅亭東屋」の挿絵(四枚続き)に描かれた「東屋」の前身にほかならない(『図会』は天保年間刊)。この東屋はまた中華風の雅馴をもとめて、「総宜楼」とも呼ばれた²⁰。その名づけ親が桐生の詩人・佐羽淡斎であるということは、郷土史家の間では常識のように通用している。しかし、それを証する文献は今のところ見当たらない。

思うに、「総宜楼」なる美称を与えたのは、大窪詩仏ではないか。

その証拠の一つが創刊号掲載の『武州金澤四時總宜之樓碑石圖』²¹で、本図上辺には大窪詩仏の手になる「縦一尺二寸／横六尺」という「樓上扁額」の図が掲げられている。詩仏一流の毫^{ふで}を揮って曰く、「四時總宜之樓」と——いかにも詩仏らしい才気ひらめく書である。おそらく酒を酌みつつ翰^{ふで}を弄したものであろう。

それにしても、「春夏秋冬総てに宜しき^{すべ}楼^{よろ}」^{たかどの}とは、詩仏らしいサービス精神にあふれた発想に思える。というのも、今回、彼の別集『詩聖堂詩集』²²を再読して強く感じたのが、潤筆料を稼ぎにゆく先々で詠んだ、いわゆる「ご当地ソング」の絶妙さのゆえである。これは地元の文雅愛好家(だいたい素封家)を喜ばせずにはおかないし、その結果、つい謝金はずませるといふことにもなっただろう。

津坂東陽という津藩の儒者は、『夜航余話』巻之下²³に、「他の国に旅寓して、其の地の事を賞賛すれば、人情うれしく思える色あり、もし水土物産をさみし、風俗地理をあしさまにいへば、かならず愠をふくむものなり」と説いたが、詩仏もその辺の機微は心得たもので、たくみに土地土地の世態人情を詠いあげては、ご当地の文雅愛好家の歓心を買ったものである(東陽は文化十一年に出府した際、詩仏に詩を贈るほどの間柄であった。ひょっとすると、この教訓は詩仏が東陽に教えたものかもしれない)²⁴。詩仏が詩癖・錢癖ふたつながら旺盛な文人の一人で、たびたび地方を遊歴し、一儲けしては江戸の詩聖堂に帰る、ということは当時から有名であった。

話を本題にもどそう。詩仏はこの扁額に自ら題して、

「文化丙寅春与／緑陰米菴竹菴／同宿此樓因書／而与之／詩佛居士^印」

という。文化三年(1806)の一月か二月に、儒者の山本緑陰、書家の市河米庵、国学者の福田竹庵の三詩友をともなって春郊を試みた折に泊まった宿が、「東屋」＝「総宜楼」であるというのである。(これは前出の『図会』「其二／旅亭東屋」の挿絵(二枚続き)に描かれた二階座敷の軒下に掲げられた扁額と同じもの。また入り口に「東屋」という看板が掛っているのが手に取るように見える)。

これだけの文人揃いだから、ただの設宴吟詠ではあるまい。が、東屋が書画会筵をもよおすに足る「楼」であったかどうか、それは追々論じよう。実をいえば、当時の東屋は村醪粗餐しか供しない田舎宿にすぎず、今日の民宿よりもかなり粗末なものであったらしい。だとしても、芸術を闘わしたり風流を競ったりするには、田舎宿とて満更でもあるまい。なにしろ「瀬戸秋月」という禅師・居士お墨付きの景勝地にある旅宿で、花中に行樂し、月下に酔うには申し分のないところであったから、わざわざ「四時總宜之樓」と揮毫したのだろう。東屋の主人は身に余る光栄と感じて、宿銭・飲み代・食い代くらいはおまけてくれたらう。

ただ、詩仏・緑陰・米庵・竹庵にとって無二の雅友であった桐生の詩人・佐羽淡斎の名が、この題署に見えないのはなぜか？ 割り切って考えよう、そのおり淡斎がこの春郊につらなることができなかつたからだというほかない。去年の『アカデミア紀要』創刊号において、私は以下の記述を引用した。

「桐生の織物商で詩人の佐羽淡斎が文化 3 年(1806)頃、詩人仲間と金沢に遊び東屋に泊まった時に、『料理、酒、接客、景色、人情すべてによろしい』と賞賛し、総宜楼の名を贈り、『金沢総宜楼に題す』と題した漢詩を詠んだ。」

これはある郷土史研究グループの調査だが、私はこの説を取らないことにしよう。第一に、淡斎は文化三年春の上記の郊行に参加していないからである。第二に、料理・酒・接客が賞賛に値するほど行き届いていたものだったかという、かなり怪しいからである。たとえば、『遊歴雜記』「第四編 参拾六 武州金沢近来花美の酒楼」²⁵に、

「……過し文化六己の巳の年八月^{ヨシヤサンセイ}瞽者三清を曳て爰に逍遥せり、頂までは此汀に一軒ならでは酒楼なく、而も^{カリソメ}仮初の家作にて麈抹の体也しに、今文政四辛の己の四月廿六日此地にふらめき慰みしが、びわ島の渚に四軒まで庇を同ふし、而もおのおの茶めきたる座敷座敷を見通し、少婦のみやびか成が^{トボン}樞に立出つゝ行客を呼入、鮮魚を調理し酒をすゝめ席上を面白ふし、興を添る分野は更に東都深川貳軒茶屋の面影あり、此日は五大堂梶原屋敷の彼方より竹輿にゆられて、瀬戸橋の際なる吾妻屋安右衛門が宅へ乗込ぬ、時は己の半刻に過ぎれど各昼餉したゝめぬ、然るに去し文化六年の己の巳年八月、同じく文化十一甲戌の年三月、此地に逍遥せし頃まではあづまやが宅もさせる家作にてもなく、座敷の^{マカズ}間員も多からで給仕する女も漸く一兩人ならではなかりしに、纔に七八年の間に家作も建直し広げけん、座敷の間数凡そ六ッ七ッありて、或は折曲り又は廊下伝ひ内庭の樹石の模様造作の巧なる……」

というように、文化六年(1809)～文化十一年(1814)の時点において、一帯には「酒楼」と呼べるような建物はなく、「かりそめの家作」の宿屋があったにすぎない。「あづまやが宅もさせる家作にてもなく」、給仕する女も一人二人すぎない、というのが実態であった。いわんや文化三年の時点においてをや、である。

ところで、詩仏に以下のような「宿金沢総宜亭」という七絶がある。文化六年春の作²⁶。

晩向孤亭借一枝 晩に孤亭に向ひて 一枝を借る
客衾如鉄枕頻欵 客衾 鉄の如く 枕をば 頻りに^{そばだ}欵つ
無端半夜水声転 端無くも 半夜 水声 転じ
正是双橋潮落時 正に是れ 双橋 潮の落ちる時

これを読むと分かるように、文化六年(1809)頃、東屋はまだ「孤亭」というほどの旅舎にすぎず、「鉄のごとき布団」では安眠を得がたいのも道理で、「しきりに枕をそばだてて」、寝返りを打っているうちに、ふと退潮のとどろきを耳にしたというのである。文化三年には「四時總宜之樓」と大きく持ちあげていたのに、文化六年には格を落として「総宜亭」と呼んでいるところが面白い。「樓」は二階建て以上の建物、「亭」はやや小規模な建物。東屋は「総宜亭」くらいがふさわしいと思いなおして、詩題も「宿金沢総宜亭」と控えめにしたのであろうか。

ただ本詩の功績は、これによって瀬戸橋(二連の反り橋)の下をごうごうと音を立てて引いていく、夜中の退潮の凄まじさが、江戸の翰墨界に広く知られるところとなったということである。(地元の人にはどうの昔に知られたことだが)

かつて瀬戸橋は、内川入江への入船、また内川入江からの出船ができるように工夫された継橋であった(前出『図会』「瀬戸橋」参看)。満潮はさておき、いねがての夜の退潮のとどろきは、詩にも歌にもなる。これに加えて、瀬戸橋を「双橋」と唐風に呼ぶのが慣わしになったのも、本詩が濫觴かもしれない。

ところが、嘉永年間に内川入江が干拓されてから、山明水秀の眺望の一部は失われてしまった²⁷。瀬戸橋こそ残ったものの、鎌倉の昔から浦人・里人が朝な夕なに、目にもし耳にもした、あの引き潮・満ち潮の自然現象そのものまで失われたのである。

今に残る瀬戸橋は何の変哲もない。あの『江戸名所図会』にも描かれた「双橋」は今いずこ?の感を深くする。散歩がてら出かけてみるのも、野暮の骨頂だろう。元をただせば、金沢八景の景勝地としての衰退は、この干拓にはじまると言われる²⁸。今や昔の、山紫水明の面影がところどころに残っているにすぎない。

たまさか遊意が動いて金沢八景に足をのぼすことがあるものの、かつての眺望絶佳の景趣も、商業ビルやらマンションやらが建て詰まって、遊志勃勃という気持ちがまるで沸いてこない。しかし、現金沢八景の名誉のために言いそえよう——江戸の昔から営業している料亭「千代本」(現存)を目にすると、その老舗の風格に感心させられるし、またその近隣の琵琶島に足をこぼすと、大のおとなが磯遊びに打ち興じているのをしばしば見かける。金沢の海に多い紅甲の弁慶蟹でも採っているのだろうか? こういう見聞にも類いすることを、無邪気に楽しむ大人がいまだに存在するのは、かつて絶好の郊遊地だった名残だろう。出島の琵琶島の先端には弁財天の祠がある。その脇に、佐波淡斎の自詩を刻した「題金澤總宜樓」²⁹の詩碑がひっそりと建つ。この碑^{いしづみ}はもともと文政五年の冬に、瀬戸にあった東屋の庭内に建てられたものだが、つぎに安政五年の大火後、洲崎に改築した東屋庭内に遷され、そして昭和三十年の廃業後、誰か篤志家の手によって、ここに改修を施されたものが再建石された。この琵琶島だけは、一遊、再遊、三遊するほどの値打ちがあると言える。とりわけ夏の木陰と海風の涼味は心地よい。

ところで、佐波淡齋も詩仏の驥尾に附して、「宿金沢聴雨」という詩を作り、こう詠っている(『菁莪堂集』所収)³⁰。

纒出城中歌吹海 纒わづかに城中を出づれば 歌吹海
 馬蹄一日趁行程 馬蹄 一日 行程を趁めく
 今宵不是江亭宿 今宵 是れ江亭の宿ならざれば
 争知雨声如許清 争いかでか知らん 雨声 許かくの如く清きを

この詩は陸游(南宋の大詩人)の、以下に引く「冬夜聴雨戯作詞」(七絶)の詩句を典故とする。

「憶在錦城歌吹海 錦城の歌吹海に在りしを憶ふ
 七年夜雨不曾知 七年の夜雨 曾かつては知らざりき」

ここにいう「歌吹海」とは、今の四川省成都市にあった歌舞音曲のさんざめく遊里を指す。「錦城」は成都の別名で、良質な絹織物を産した豊かな都であったから、遊里も飛びぬけて繁華なものであったにちがいない。

淡齋詩の「纒に城中を出づれば」の「纒」という副詞は、「いましがた」という意味である。日本橋を出発してから、すぐに出くわす「歌吹海」といえば、品川宿以外にない。仕事にも遊びにも達者だった淡齋が、当時、評判の品川宿を素通りしたとは思えない。このときの遊蕩仲間が誰々であったかは知らないが、ここに一泊や二泊くらいはして、酒色の快樂を堪能したであろうと察しがつく。

それから悠々馬で品川を発てば、金沢まで一日の旅程だったようである。「宿金沢」とあるからには、東屋に泊まったにちがいない。のちのち触れることになるが、文化三年の秋、師の詩仏たちとともに、ここに止宿して以来のお得意であったことを考え合わせれば、そう推量して大過ない。

「江亭」というのは、おそらく内川入江をのぞむ旅宿だったから、かりに東屋をそう呼んだのだろう。品川宿しにくの絲肉相競うさざめきが、まだ耳に残っていたからこそ、夜半、東屋で聞いた雨の音に耳を洗われるような思いがしたというのである。当時の金沢はそれくらい静寂に支配されていたところであった。このように「雨声」が清く聞こえるのは、秋の気が澄んでいたのでとも考えられるし、また陸游の「冬夜聴雨戯作詞」を念頭に置くと、冬の夜中に聴いたためかもしかかもしれない。いずれにしても、春夏秋冬を問わず、文化十二年(『菁莪堂集』刊行の年)以前の詩作であることは確かである。

淡齋の第三詩集である『菁莪堂集』は、古体・今体・竹枝体の詩を雑然と集めて一本とし、拾遺集のような観を呈している。第一詩集『淡齋百絶』(文化六年刊)や第二詩集『淡齋百律』(文化十年刊)のような編集の整然たるに及ばない。あるいは両集以後の作詩、あるいは両集に収めきれなかった作詩を拾い集めているように見えるから、拾遺と考えるわけである。

第一詩集の『百絶』には、「文化己巳〔六〕冬至三日前」の撰に係る山本北山の序文(巻菱湖書)があり、加えて菊池五山の序文(巻菱湖書)がある。北山、五山、菱湖はみな隠れもない「都下の詩伯」で、詩仏が参加したエコールに属する文人たちである。彼らの後押しによるデビューは、まぶしいくらい華々しいもので、淡齋の『百絶』一卷は世に行われたという³¹。

そこで間違える危険をおそれずに言うのだが、この「宿金沢聴雨」は、先に述べた文化六年の詩仏の

郊行詩連作(その一つが「宿金沢総宜亭」と同時期の作ではないか? 師の『詩聖堂詩集』と弟子の『淡斎詩集』を併せ読むと、江戸に出た淡斎が、我が師・詩仏と行をともしなかったとは考えられないし、また詩仏は詩仏で、出府した桐生の豪商・淡斎の懐を当てにしていたので、くだんの春遊に師弟うちそろって出かけたのではないかと推量するのである。その可能性を完全に否定し去ることはできない。あるいは『百絶』の選からもれた作ではないだろうか? 最初の詩集『百絶』は「都下の詩伯」たちの校閲の篩いにかけてられた結果の別集だから、そう思うのである。

そうでないにしても、少なくとも「宿金沢聴雨」の七絶が、文化六年から十二年までの作詩であるということは間違いない。ここで前に引いた『遊歴雑記』の「文化十一甲戌の年三月、此地に逍遥せし頃まではあづまやが宅もさせる家作にてもなく、座敷の間員も多からで給仕する女も漸く一兩人ならではなかりしに……」というくだりを思い出していただきたい。東屋が糸竹管絃に浮かれるような旅亭ではなかったことは歴然としている。あるいは一人や二人の芸者は置いていたかもしれない。しかし、よく三味線の音締めで芸者のお里が知れるというが、かりに酌婦がいたところで、どうせお里の知れた女子衆だったにちがいない。

ところが、七八年後の文政四年以降にもなると、金沢八景遊覧の大衆化が始まり、東屋以外にも旅館が軒を並べて、客を呼ぶようになった。

「……爰には鵬斎が額、かしこには米庵が聯、扱は南畝季鷹の類を間毎間毎にかけ、あるじ和歌に心やよせぬらん、床の間毎に宣長千蔭、自寛、春海、信風の色紙の類を懸並べつゝ、客あしらふ女も五六人ありて、繰出す膳廻りの綺麗さ、鉢組の取合のよき、扱は調理の味好なるに驚に堪たり、是や東都の人々常に此地にぶらめき、又は領主の藩中平生に交代して此地に遊ぶが故に、自然と江府の風土推移り土地の家居より諸事花美に成しやらん、以前の様子に比すれば十倍にして繁華拔群といふべし、……」³²

と十方庵は急速な東屋の発展ぶり、洗練ぶりに舌を巻いている。このように、江戸の文人墨客を上客としたのは、東屋安右衛門が和歌の心得もあり、風雅を解する主だったからだろう。同気相求むというわけである。

「……むかし安永二癸巳のとし四月、愚老いまだ十三歳母従者と共に、宮の下湯治の帰るさ、此地に遊びし頃は、名主五郎右衛門が宅を第一とし、其外には酒樓を兼て夜は旅籠やせし家々は、南の方橋本より北は町屋村まで凡二十町の間纔に四五軒に過ぎざりしに、五十余ヶ年の星霜を経し只今は、此金沢の土地に料理茶屋といふもの貳拾余軒各家作を風流にし調味を争ひ器物を撰む、是に依て飄客爰に宴遊して万花美に押移り、別して今辛の巳年は江の島下の宮開帳とて、三月上旬より百余ヶ日の間、東武より行や戻りや、逍遥する男女の多き俛、日頃に越て此地の繁昌するも、偏に聖代の御光有がたき時節といふべし、頓ておのおの飽まで飲宴しつゝ安右衛門が舎りを立出、ふらふらと町屋村を過湖水縁通り君が崎をも打越、爪先あがりに段々と高きに登り杖をたのみ腰を熨ながら、既にして能見堂に至る、……」³³

以上の記述を併せ読むと、東屋が立派な旅館として認められるようになったのは、「今辛の巳年＝文政四年」(1821)以降のことであるらしい。安永二年(1773)の頃には、東屋はあるかなきかの体の旅籠に過ぎなかったが、文政二年五月二十五日には、見沼の通船方をつとめた江戸の豪商で、高名な国学

者であった小山田与清が、ここに泊まったことがあるということは、『アカデミア紀要』創刊号において既に述べた。十方庵が見た文政四年ころの金沢八景の料亭茶屋は二十余軒にもおよび、酒色を売って繁昌をきそったようである。「飄客」とあるから、そう言うのである。「飄客」とは遊里に遊ぶ客をいう。どうやら、江戸の文人墨客が風流韻事をもとめて、我も我もと東屋に押しかけ、詩書画の類を書き残したのは、文政年間からのことらしい。ひとくちに風流韻事というが、これには詩酒徴逐や玩山遊水はもとより、男女交歓も含まれる。これは唐土の文人でも本朝の文人でも変わりはない。

こういう金沢八景大衆化の結果が、江の島参りの精進落としも金沢の料亭で行われたということで、これは大山参りの精進落とし(落語)とともに有名な話である。天保年間にもなると、いちだんと大衆化に拍車がかかり、かの十辺舎一九も、東屋が女色を売っているありさまをこう描いている³⁴。

六浦をすぎて金沢の三島明神の社、琵琶島弁財天より東屋といふみはらしよき茶屋にいらてあそぶもの、遊山、蛤とりのなぐさみあり。この庭の生簀に、いろいろの魚、鱈ふりあそぶさま、海の魚のいきたるハ都会の人の目にハめづらしく見えたり、

狂いつかハとまちしねがひもかなざハの

あづまやに見える春の八けい

「さあさあお客だよお客だよ。奥のお座敷ハあいているか。なんでもうつくしいぞろいの女中の方ばかり。そのかハリ、そうぞうしいばかりで、たんとの錢もなるまいけれど、よもやくひにげハあるまい。なんでもそろいの着物で、金をつかひそうにハミへても、頭にハ鼈甲と見せて、今はやりのびいどろだから、その気でいきなさい」

大正期のジャーナリスト大庭柯公の『江戸団扇』について見ると、「硝子が欧州各国に広く製造さるるに至ったのが十七世紀だとすれば、十八世紀のなかばに江戸でビイドロの製造を見たことは鎖国の我が国としては、好成績と言えよう³⁵とある。流行というのはおそろしいもので、十九世紀前半の金沢にはもう、鼈甲と見せてビイドロの簪をした「うつくしいぞろいの女中」が嫖客を呼んでいたらしい。「今はやりのびいどろ」とは、前引の『遊歴雑記』にも「自然と江府の風土推移り土地の家居より諸事花美に成しやらん」とあるように、これは江戸最新の風俗のまねだろう。よし「頭に玳瑁の櫛簪を飾り、身に錦繡の襦袢を纏う³⁶た江戸吉原の花魁の華麗さには及ばずとも、遊蕩気分をみなぎらせた嫖客が、玳瑁(鼈甲)まがいのビイドロ簪を頭に差した江戸近郊の「女中」に、手もなく吸い寄せられたということは容易に想像がつく。十辺舎一九も—その後の描写をひかえているが—「その気でいきなさい」という客引きの声に応じて、ずいとお奥に通ったことは疑いを差しはさむ余地がない。

これは安永の昔には考えられぬことであった。ビイドロ製造の成功から二三十年も経たない安永二年(1774)、母とともに八景に遊んだ十方庵(当時十三歳)は、その五十年後の行楽地としての発展ぶりを見て、

「……此地の繁昌するが故か、一切の事田舎にも、不相応の花美に押移し事嘆息するに堪たり、」³⁷

と溜め息まじりに記している。とりわけ東屋の華美は、浮世絵師・歌川広重の「金沢八景」連作中の「瀬戸秋月」(天保七年頃)にも描かれて評判をとった³⁸。一輪の月下、座敷という座敷にこうこうと灯りをとも

している東屋は、おおげさに言うと、不夜城というに等しい。百目蠟燭を惜しまずに、幾十幾百本も灯したのであろう。あれだけの明るさは贅沢のきわみと言っていい³⁹。

三

佐波淡齋、名は芳、字は蘭卿、号は淡齋、また風月主人とも称した。安永元年(1772)、桐生の絹買次商の四男に生まれ、幼名を安之助といった。資質聡明、若い頃から作詩に熱中したらしい⁴⁰。桐生は日本で一二を争う機業の都邑で、早くから漢詩人を生み出す下地があったと言っていい。文化七年(1810)、淡齋は初代吉右衛門を継いで、二代目吉右衛門を名乗り、桐生随一の絹買次商となり、江都の商界にもレッキとした「巨賈大商」として押し出していく。これは創刊号ですでに言及したことが、主に「都下の詩伯」のために、文化的パトロン役どころを演じた。具体的な例は追々述べることにしよう。淡齋が果たした文化的事業の多面性は、おいそれと書ける代物ではないからである。

「都下の詩伯」というと、まず中央の文人で最初にその詩才を見出したのが、あの亀田鵬齋である。『菁莪堂集』⁴¹の鵬齋序にいう——享和元年(1801)、上毛を訪れたときのこと、桐生は絹で栄える都邑なのに、詩文を解するものは淡齋(当時三十歳)一人きりだった。その頃はまだ前時代の「擬唐詩」を作っていたが、その後、「都下の詩伯」たちと交流するうちに、たちまち腕を上げて新時代の「清新性霊」の詩を作るようになった——と。

「都下の詩伯」とは大窪詩仏・市河寛齋・山本北山・菊池五山・柏木如亭などを指す。当然のことながら、これら江戸一流の詩伯に教を乞うには東脩が必要である。おそらく、気前のいい淡齋は過分な指導料を払ったことだろう。地方の素人詩人には、詩伯たちの格別な眷顧をこうむっているから、そう言うのである。当然、桐生・江戸間の詩筒の往来も頻繁だったと思われる。江戸と桐生は徒歩で約二日の行程で、行人車馬の来々往々すること、絡繹として絶えずといった観を呈していたであろう。

渡辺崋山の『毛武遊記』⁴²によると、「桐生流遇者甚多」と書いた後で、詩人として柏木如亭、市河寛齋、糸井君鳳、佐々木雲山(宮沢雲山のこらししい)、斎藤天籟、書家として巻菱湖、画工として建部綾足、呉竹沙、国学者として清水浜臣などの名をあげている。いずれもその道では知られた名家ぞろいである。ここにいう「流遇者」とは、潤筆料稼ぎのため長逗留したものをいうが、桐生にはこれだけの芸術家・学者諸氏を養うだけの経済的文化的実力があったわけである。

享和元年、おそらく鵬齋来訪の後のことだろうか、淡齋は斎藤天籟(北山門下)の来遊したのを機会に、同郷の有志数名と詩社を結び、翌享和二年(1802)の歳暮には、早くも『桐郷風雅集』⁴³という小アンソロジーを編んだ。いずれも宋詩からの尋章摘句といったような、お行儀のいい詩が並ぶ。周骨平先生ふうが悪く言えば、「田舎在所にて詩語碎金・宋詩語にて模擬する、富家の子弟の詩」⁴⁴が目立つのである。しかし、とにもかくにも一年足らずで、一応の成果を世に問うことができたことは脱帽のほかない。また同年の秋には大窪詩仏も来桐した形跡がある⁴⁵。このとき詩仏・淡齋の二人は師弟の礼をとったにちがいない。このとき以来、淡齋は徐々に文人風の手並みを見せはじめる。

おそらく、これも詩仏の周旋によるものにちがいないが、文化元年(1804)には、佐原菊塢編『盛音集』(天下の名流百家の漢詩を集めたもの)に、淡齋詩が一首、「賦得山重水複疑無路柳暗花明又一村」と

いう七絶が採用されている⁴⁶。ここでは詩は略に従うが、題を見ただけでも南宋の大詩人・陸游の七律「游山西村」の影響が著しいことが分かる。太田錦城の序(享和三年)によると、「近従詩仏学詩」とあるから、このころから菊塙も詩仏を師と仰いで詩を学ぼううちに、この出版を思いついたらしい。詩仏にとっても、ここは渡りに舟というわけで、同門の淡斎の詩を載せるように取り計らったのだろう。(信濃の詩人・木百年の詩も収録されているが、それも詩仏や如亭の推薦によるものだろう)

淡斎もかつての淡斎でなく、二三年足らずで「旧習」から脱して(『菁莪堂集』鵬齋序)、江湖詩社(寛齋主宰)の新詩風を学び取っている。いま作詩の巧拙は問わない。ともあれ、『盛音集』に淡斎詩が収録されたということは、淡斎と菊塙の交際が開けたということを意味する。これはまたとない同臭の邂逅であったと言っていい。二人とも名の知れた豪商で、二人とも大の梅好きである。菊塙は文化二年(あるいは元年か?)に、宋の林和靖(967-1028 梅を子、鶴を妻とした)のまねをして、三百六十株の梅を植えて新梅屋敷を造園⁴⁷。淡斎も右にならって、文化十一年に桐生の自邸の後山を買い、数百株の梅を植林し、翌年には見事に全開させたという⁴⁸。江戸のお大尽というのは、えらく手間のかかる造園を易々とやっつけてのける。おそらく、腕のいい植木職を何十人も動員した結果にちがいない。また、こういう依頼主の大きかりな注文に応えるだけの熟練した植木職人が、江戸時代には大勢いたのである。江戸の園芸文化の裾野は広大であった⁴⁹。

よく『盛音集』は花屋敷宣伝のための売名的出版物だと言われるが、これによって「淡斎」という号も、名流百家の圈内・圏外に知れ渡ったことは僥倖であった。のちのち「淡斎」という号だけで江戸文林に通用したからである⁵⁰。

おそらく文化元年か二年には、『盛音集』の出版祝いの宴会が派手に催されたはずである。はずであるというのは、菊塙という御仁は伝記不詳のつかみどころのない男で、このときの出版記念会の資料をいまだに発見していないからである。しかし寛政四年(1792)、桐生の長沢紀郷(淡斎の先学)が、『幼草遺稿』刊行準備のために不忍池畔の酒楼で派手な宴会を開いたこと⁵¹を思い合わせると、『盛音集』出版記念の宴は江戸一流の料亭で開かれたにちがいない。でないと、名流百家が指をくわえて黙っているはずがあるまい。とりわけ文化文政期は貴賤上下ともに宴会好きで、遊び好きな世の中だったから、そう言うのである。出資は金離れのいい淡斎がまかなったに相違ない。佐波秀夫氏によると、淡斎は江戸の市村座・中村座・猿若座の三座の勸進元となり、役者に桐生の織物を着せて宣伝に利用したという⁵²。そこから得た利益は莫大で、これをもって遊興費に充て、また文雅の士を優遇したとも言われる⁵³。

たとえ出版記念会がなくても、淡斎は商売がらみ、あるいは詩友との交際がらみで、何度も出府していたことは、『淡斎詩集』について見れば明らかである。しかし——繰り返して言う——例の文化三年(一月か二月)の金沢春遊には参加していない。淡斎は詩仏・緑陰・米庵・竹庵たちと同じエコールに属し、交流はなほだ密であったにもかかわらず、この春遊に同行しなかったのはなぜか? 拍子ぬけのする言い方だが、お互いの都合がつかなかったからだと言うほかない。

同年三月四日、江戸は大火に襲われ、詩仏は再起をはかるため、春から秋にかけて遊歴の旅にのぼる。残された資料を見るかぎり、淡斎が詩仏たちの八景探勝に同道するのは、同年秋のことである(後述)。

四

不思議なことに、十方庵は詩仏の扁額「四時總宜之樓」については何も触れていない。「東屋」「吾妻屋」「あづまや」と呼ぶばかりで、「総宜楼」とは、ひとことも言っていないのである。

くだんの篆額はいつ東屋の軒下を飾ったのであろうか？ 現在のところ、前出の『碑石圖』(文政五年以降のもの)と『図会』「其二／旅亭東屋」(天保年間刊)の挿絵以外に資料を見ない。おそらく—文政期後半から天保期前半にかけて—くだんの題額は東屋の軒に掲げられたものと思われる。それはもちろん詩仏の盛名を利用して宣伝効果をねらったものだが、この看板が東屋発展の基礎となる。ともかく、江戸の詩人・歌人・書家・画家・俳諧師・狂歌師、明治の政治家・皇族などを有力な客筋とした歴代東屋の商売上手はお見事と唸るほかない⁵⁴。これら名士名族の宿泊が、おのずと旅亭東屋に箔をつけたことは言うまでもない。

ところが、安政五年(1858)の瀬戸大火で、東屋も類焼に罹って、文久三年(1863)に、瀬戸橋の西詰め(瀬戸)から東詰め(洲崎)へと移転している⁵⁵。その後も関東大震災(1923)の被害をこうむったが、よく立ち直って営業をつづけた。しかし昭和三十年(1955)、ついに廃業のやむなきに至った。高度成長期の東京人・横浜人は、安永の昔からつづく老舗中の老舗・旅亭東屋を必要としなかったからである。かわりにレジャーなるお手軽な行楽が擡頭し、泊まりがけで金沢に遊ぶ風流人など、今や棄にたくもない。

廃業後、例の詩碑も誰かの手によって総宜楼庭内から琵琶島弁財天の脇に遷された。その存在は忘却の淵に沈みかけていたが、それを苦労して発見したのが桐生市の郷土史家・小林一好である⁵⁶。

例の詩仏の扁額に関しては、鎬木清方が随筆「金沢八景」⁵⁷の中で、いちど寓目したことがあると書いているので、廃業の昭和三十年頃まではあったと推測がつく。しかし敗戦後、詩仏の株もがったり下がって、旧時代の扁額なんぞ、弊履のごとく捨てて顧みられることはあるまいと思っていた。が、あるとき神奈川県立図書館郷土資料室の書架に、「神奈川県立金沢文庫テーマ展の図録」⁵⁸という冊子を見かけて、ふと手に取ってみると、中に「四時總宜之樓」の実物の写真が掲載されているではないか。しかも件の扁額は「神奈川県立図書館蔵」と書いてある。早速、一覽を願い出ると、長くお蔵入りとなっていたようで、嚴重に梱包された実物が運び出された。包みが解かれると、時代のついた檜の一枚板があらわれた。私は息をのみ、その一枚板に見とれた。後日、あらためてデジタル・カメラと巻尺を持参して撮影したものが以下の写真である。



これぞ今まで繰り返し述べてきた、大窪詩仏の扁額の実物の写真である。

まず巻尺で寸法をはかると、縦39×横184.5センチ。一字一字食い入るように見ると、「四時總宜之樓」と彫りこんである。前述の『武州金澤四時總宜之樓碑石圖』にいう「縦一尺二寸／横六尺」の「樓上扁額」の寸法ともほぼ合っているし、書体も詩仏のものなら、自ら題して「文化丙寅春与／緑陰米菴竹菴／同宿此樓因書／而与之／詩佛居士口(落款「行／天民」陰文方印)」というのも、『碑石圖』と同文である。なにしろ二百余年前のものなので判然としないが、「四時總宜之樓」の文字にはわずかながら胡粉のような白色が残っているし、題文には青い塗料が、落款には——変色しているかも知れないが——黒褐色の塗料が微かに認められる。

大窪詩仏(号)、名は行、字は天民、当時売り出し中の詩人である。緑陰は山本北山(儒者)の子で、家の学を継いだ。米庵は市河寛齋の子で、書家として有名である。竹庵は国学者であるが、漢詩もよくしたという。この四人が東屋に泊まり、酒間に韻を闘わせたのだらう。その際、「東屋」という和名ではいかにも和臭するので、詩仏が中華風の雅馴を求めて「総宜樓」という唐名を思いついたのではないか？

いずれにしろ、文化三年春の題額が、安政の大火、関東大震災、横浜空襲⁵⁹といった天災人災をくぐりぬけて、よくぞ残ったものだと思わせられた。これは貴重な神奈川県民の文化財である。

五

話題をもどそう。

文化元年か二年には、淡齋は『盛音集』の出版祝いで江戸に出ているはずである。これはあくまでも推測にすぎないが、菊塙の面識を得るには、またとないチャンスだったからである。詩仏の「江戸に上れ」という慫慂もあったらう。むろん淡齋とて、この絶好の機会をみすみす逸するような商人^{あきんど}ではない。

繰り返しになるが、文化三年春の詩仏ら一行四人の八景探勝に加わっていなかったことは、上図の扁額をみれば火を見るより明らかだらう。同年三月四日、江戸に大火出来。詩仏も家居を焼失している。してみると淡齋は、同年の春も夏も、出府を見合わせたのでないか。

しかし文化三年の秋には、淡齋は江戸に出て来ている。同年の秋、潤筆料稼ぎの地方遊歴からもどった詩仏は新しい家を築いた。おそらく新居落成後のことだらう。大火で家をうしなった師の新築祝いに駆けつけられないほど、淡齋は人情の機微の分からない世間見ずではあるまい。なにしろ初代の店を継いで桐生随一^{おおだな}の本店に引き上げた一代の大商人^{おおあきんど}である。要所要所、金の使い道は心得たもので、もちろん新居落成の祝儀はたんまりと弾んだらう。

この年の秋、出府した淡齋は詩仏たちと金沢八景へ「郊行」に繰り出して、東屋に泊まっている。この郊遊の金主はもちろん淡齋だらう。都下の詩伯たちが彼の潤沢な資金を大いに当てにしていたことは、前出の「桐生流遇者甚多」という華山の日記の記述からも知れたことである。

東屋といえば、「瀬戸秋月」で有名な一等地に出店していた宿であるが、元来、粗末な旅籠すぎなかった。文化三年秋の郊遊のときも、まだ田舎宿に毛が生えた程度のものであったことは、前引の『遊歴雑記』について見れば審らかである。しかし、このとき淡齋は以下のような「郊行漢詩」二首を作った。二首は『淡齋百律』⁶⁰に収録されたが、当然、詩仏の添削が加わっている。(当時、「郊行漢詩」が流行したことは、すでに創刊号で述べた)

「金沢道中」

| | |
|---------|--------------------------------------------------------------|
| 経過窈窕又崎嶇 | 窈窕 <small>ようちよう</small> を経過すれば、又た崎嶇 <small>きく</small> |
| 野趣村情無処無 | 野趣村情 無き処無し |
| 能見堂中煮香菌 | 能見堂中 香菌 <small>に</small> を煮 |
| 総宜楼上斫鮮鱸 | 総宜楼上 鮮鱸 <small>き</small> 斫る |
| 風流畢竟為何物 | 風流 畢竟 何物為るや |
| 好事応須属好事 | 好事 応に 須 <small>まさ</small> く我が徒に属すべし |
| 頼是同遊有工画 | 頼 <small>さいはひ</small> いに是れ 同遊に 画 <small>たくみ</small> に工なるものあり |
| 蕭閑写得六賢図 | 蕭閑 写し得たり 六賢の図 |

(本詩では「総宜楼」に作る)

「金沢総宜亭」

銀鱸紅蟹眼偏明
況有村醅香味清
坐客拌来鯨海飲
傍人扶得玉山傾
蒙鬆眠自醉時熟
冷淡詩於醒後成
不識双橋殘夜雨
夢中喚作退潮声

(本詩では「総宜亭」に作る)

上に引いた二首は秋の作である。詳しいことは後にゆずるが、「香菌しいたけ」も「鱸すずき」も「蟹」も秋が旬の食材だからである。

「金沢道」とは、東海道保土ヶ谷宿より蒔田→上大岡→中里→能見堂→称名寺→瀬戸→朝比奈→鎌倉とつづく。行楽の経路として江戸人が好んで歩いた道である。春は桜の並木、秋は紅葉の並木づたいに流して歩くのは人生行楽の第一義である。途中の休憩所は能見堂⁶¹、行楽客に茶菓を供したり、またシイタケ料理まで出したりしていたようだ。能見堂発行のパンフレット『金沢八景案内子』などが飛ぶように売れたわけである。(この道は逆に、鎌倉から金沢を通して関東平野に抜ける道として古くから利用されていた交通の要衝だったという)⁶²

「金沢道中」の注記によると、このときの同遊者は、大窪詩仏・山本緑陰・糸井君鳳(儒者、北山門下)・木百年(詩人、柏木如亭の弟子)・喜多武清(画家、谷文晁の一門)で、このとき武清が一行六人の「六賢図」なるものを描いたという。「能見堂中煮香菌、総宜楼上斫鮮鱸」とあるが、「六賢図」は能見堂で描いたのか、あるいは総宜楼で描いたのか分明ではない。しかし、なにかしら書画会を開いたような気配がある。会の引札は残っていないが、これだけの詩上手、絵上手、書上手がそろっているのだから、

各所の宿屋の主人が黙ってはいまい。書画会とまではいなくても、少なくとも短冊ないし書画の一枚や二枚くらいはせしめただろう。

「金沢道中」の詩は決して佳作とはいえない。「経過窈窕又崎嶇」という詠い出しが常套に墮しているからである。

しかし「金沢総宜亭」のほうは、「平淡」の一首として、よほど詩仏のお眼鏡にかなったようである。「詩貴平淡、平淡、詩之上乗也」⁶³という詩仏年来の主張と合致したためだろう。「平淡」とは「言近意遠」の謂である。このときから十六年後、淡斎の「金沢総宜亭」は詩仏の書によって碑刻され、東屋庭内に建てられた。堂々たる^{いしぶみ}碑である。このことはすでに創刊号で述べたし、現存する石碑の写真も掲載した。だが、この詩と碑について論ずるには、もはや紙数がつきた。残念ながら、次号で改めて詳しく説明したいと思う。あえて「金沢総宜亭」の詩に訓読をほどこさなかったのは、そのためである。

【創刊号の正誤表】

39 頁 3 行目 「瀬戸神社から大川に架かる瀬戸橋を渡って洲崎に入ったあたり」→「瀬戸明神の社前、瀬戸橋の西畔に」

43 頁 14 行目 「楊誠齋」→「楊万里」

45 頁 4 行目 「泊まったとき」→「泊まった時に」

45 頁 6 行目 「文化5年」→「文化5年」 総宜楼詩碑の建碑は文政五年だからである。

45 頁 14 行目 「文化文政期」→「文政期」

47 頁 8 行目 「双」→「隻」

48 頁 2 行目 「添書」→「自題」 「丙午」→「丙寅」

52 頁 15 行目 「早稲田大学総合データベース」→「国立国会図書館近代デジタルライブラリー」

52 頁 19 行目 『淡斎詩集』→『佐波淡斎詩集』

【付記一】

『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』創刊号 p.41 に掲載した「武陽金沢八景略図」(神奈川県立図書館蔵)および同頁十四行目の「(あるいは明治か?)」という我が記述について――

これについては、金沢八景研究の新参者である私には不明なところがある。図中の東屋は瀬戸橋東詰めにあるから、安政五年の大火後に改築したものだということは言うまでもない。金沢八景研究者の常識である。しかし、①初代金沢文庫長・関靖の聞き取り調査(『かねさは物語』p.170)と、②『金沢八景 歴史・景観・美術』(金沢文庫特別展図録)を作製した学芸員の説明をつきあわせて読むと、首をひねらざるをえないところがある。

①「……東屋は初めは千代本や扇屋などの料亭と同じに、瀬戸橋の西側にあつたのであるが、安政五年頃に、千代本から出火で類焼し、文久三年に地所のことで、瀬戸神社との間に紛擾があつて、今の瀬戸橋東詰に移つたのであるから、この東屋の位置は、八景一覽図の時代を定める上に、大切な標準となるものである。(東屋に関することは、元金沢町長松本房治氏及東屋主人の談話によつたもので

ある)

②「52 武陽金沢八景略図〔東屋版〕(色刷)」これには三つの瓢箪の絵を描き、中央の瓢箪に「金沢八景 東屋蔵」と書いた「包紙」の図が添えられている。三つ寄せ瓢箪といえ、三拍(瓢)子揃って縁起物よいということで、浮ついた行楽気分を訴えやすいお土産である。(あるいは三つ瓢箪は東屋の家紋か?) ②の説明文はこうである。

「金沢では最も由緒を誇った旅亭が開版した図。これも金龍院版をもとにしているが、自店を大きく描くのは当然といえる。神仏分離以前の注記が見られるので、幕末の版行であろう。」(『図録』p.109)

ところが、①「(辛) 東屋蔵版のもの」(『かねさは物語』p.178)の項に、「図上の文字は前と同じである(筆者注:千代本蔵版の色刷「武陽金沢八景略図」と題が同じだということ)。多喜齋写としてあるが、図は極めて粗末で、勿論明治以後に出来たものである。」とある。

まず分からないのが②の「神仏分離以前の注記」なるものが図中のどこにあるのか、見当がつかないことである。もしこの「注記」が見つければ、東屋が出した「八景略図」は文久三年後から慶応四年前のものとなる。もしこの「注記」がなければ、①のように「勿論明治以後に出来たもの」と見てもいい。いかにも安っぽい明治の錦絵然としているからである。いずれが正しいか今後の研究に委ねたい。

【付記二】

大窪詩仏の扁額「四時總宜之樓」の実物の写真を撮る際、神奈川県立図書館の鳴海恵美子司書や森由紀司書などの御協力を仰いだ。この場を借りて、お礼申し上げます。

【付記三】鎌倉瑞泉寺の現住職・大下一真師に対し、心越禅師の「金沢八景」の詩の所在について、突然、電話したり、手紙を差し上げたりしたが、にもかかわらず、丁寧にご返事をくださった。お礼申し上げます。

【注】

¹ pp.39-54

² 初代金沢文庫長の関靖によると、「すさきのせいらん」「せとのしゅうげつ」「こずみのやう」「おつともきはん」「しょうみょうのばんしょう」「ひらかたのらくがん」「うちかわのぼせつ」「のじまのせきしょう」と読むという。関靖著『かねさは物語』(横浜土地新報社、昭和十三年)pp.137-44。

³ 「筆捨松」山田肇編『鏑木清方文集／五 名所古跡』(白鳳社、昭和五十四年)所収、pp.240-4。ある夏、東屋という旅亭に長逗留した鏑木清方は、江戸時代からつづく、この宿の由緒来歴に一目置くようになり、やがて金沢に別荘を構えるほどのほど、この土地を愛した。清方の随筆「続 しかたの記」には、江戸の文人たちに愛された東屋の故事を書いている。この文章は後の研究の心覚えのため、注34に記しておいた。(『ヨコハマ文学散歩』からの転引ではあるが)

⁴ 日本歴史地理学会校訂『大日本地誌体系 新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』(大日本地誌大系刊行会、大正四年)p.8。『新編鎌倉志』は徳川光圀が彰考館員の河井恒久らに命じて編纂した鎌倉の地誌で、延宝元年に光圀自身が鎌倉を旅行した際の見聞記『鎌倉日記』(延宝二年)をもとに編纂された。

⁵ 十返舎一九作・北尾美政画の絵草紙『諸国道中金草鞋』十九「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」(天保四年刊)のうち「金沢」。引用は鶴岡節雄校注『箱根／江島／鎌倉道中記』(千秋社、昭和五十七年)p.54の翻刻に依った。なお鎌倉市史編さん委員会編『鎌倉市史 近世近代／紀行地誌編』(吉川弘文館、昭和六十年)も同書の翻刻を行っているが、鎌倉に関する記述の翻字であり、「六浦」「金沢」「能見堂」などの項は略している。『鎌倉市史』というからには、やむをえない処置である。

⁶ 萩野復堂著・萩野鳩谷訂『東藻会彙地名箋』巻上「地理上 東海道類」東都 須原屋伊八、安永八年。

⁷ 三浦浄心作『順礼物語』(朝倉治彦編、古典文庫、昭和四十五年)p.104。本書の解説によると、『順礼物語』には寛永中板と、絵入改題本『名所和歌物語』とがある。しかも後者には元禄十六年板と無刊記本との二板があるという。

⁸ 本冊子は紙質が粗末で、五丁と数えることができる(表表紙はあるが、裏表紙はない)。いかにも安価なものらしく、次の①②の特徴がある。

①内題「金沢八景」。題名の上に墨刷りの「月岡／蔵書」という蔵印があり、その下に「江都 十寸見蘭余述」という述者名がある。これは「金沢八景」の案内(謡曲調の和文)であるが、この案内文には匡郭・丁数が付されていない。如上の蔵書印と述者名にどれくらいの価値があったのか、今のところ不明である。

②内題「能見堂八景」。心越禅師・無生居士の詩歌が対照されている。これには匡郭があり、「一、二、三」と丁数が記されている。

①②ともに仮綴和装。仮綴の紙捻の左に、やや小さめの綴穴が四穴、加えて、そのさらに左に、やや大きめの綴穴が二穴ならぶが、ともに紙捻は失せている。①と②は当初から合冊のものか、あるいは後年の合綴に係るものか不明である。(①には刻工名と落款があるのに、②には両方ともないのはなぜか?)

また神奈川県立図書館にも、「天明甲辰七月擲筆山地蔵院現住来仙再刻」の『金沢八景案内子』が所蔵されている。しかし、内題「金沢八景」には「月岡／蔵書」の印記がないうえ、「江都 十寸見蘭余述」という述者名もない。この案内文には匡郭・丁数はないが、内題「能見堂八景」には匡郭とともに、「一、二、三」の丁数がある。本来、和装仮綴であったのが、後年、保護のため、線装本に仕立てられている。

なお天保期の『案内子』は数多く残っているが、蘭余の案内文があるものもないものがあり、案内文があっても「十寸見蘭余述」という述者名がないものもある。また、いずれも「月岡／蔵書」の蔵書印はない。

⁹ 中野猛編『略縁起集成』第6巻(勉誠出版 平成十三年)所収の翻刻p.28-32を参照した。「天明甲辰秋七月擲筆山地蔵院現住来仙再刻」の刊記あり。

¹⁰ 表紙の下半分に図あり。磯馴れ松の立つ岸边に、波立つ海という図案である。決して上手な絵ではない。

¹¹ 蔵印は朱文ではなく、墨刷りのように見える。「月岡」とは知らぬ名だが、これを巻首天頭に目立つように印刷すれば売れると踏んで、能見堂が開板したものなのかもしれない。しかし、慶應義塾大学図書館蔵『金沢八景案内子』以外に、この印記を見たことがない。この辺の事情がよく分からないので、後考をまつ。

¹² 十寸見蘭余が何代目か今、調べている余裕がない。ただ、河東節がこの頃から流行し、十寸見の人氣にあやかりとして、巻首に「十寸見蘭余述」という述者名を、わざわざ入れたものだと推察される。しかし他の『案内子』に、この述者名を今のところ見たことがない。

¹³ この跋は、やや異同があるが、『江戸名所図会』巻之二「金沢」の項にも引用されている。市古夏生・鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』2 ちくま学芸文庫、pp.324-5 参照。

¹⁴ 「武州金沢能見堂八景」『東臯全集』巻上(一喝社、明治四十四年)pp.126-7 所収。陳智超著『旅日高僧東臯心越詩文集』(中国社会科学出版社、1994)pp.152-4 所収。

杉村英治著『望郷の詩僧』(三樹書房、一九八九)pp.142-4によると、貞享四年、心越禅師は「長崎からの帰りを鎌倉の瑞泉寺に立ち寄ったようで、金沢八景の詩がある」という。また徐興慶著「心越禅師と徳川光圀の思想変遷試論—朱舜水思想との比較において—」『日本漢学研究』第三号(二松学舎大学、平成二十年)所収の「心越禅師が日本に残した書画等一覧表」p.320によると、『金沢八景』／詩／鎌倉瑞泉寺／1687年4月」とあるが、現住職・大下一真師に問い合わせたところ、「当山の宝物蔵のリストには該当のものがない」とのこと。あるいは別名になっているかもしれないので、蔵に入ったときに心がけて探してみるといふご返事があった。

前掲『望郷の詩僧』は「武州金沢能見堂八景詩」は元禄元年の夏、江戸で作られたものだといふ。これは前述のように『江戸名所図会』にも収録され、今日、一般的に禅師の「金沢八景詩」といふのは、これを指す。

¹⁵ 前掲『旅日高僧東臯心越詩文集』の口絵「図 17 印譜」。

¹⁶ 無生居士の八景八首はなぜだか、『江戸名所図会』には収録されていない。奇妙といえば奇妙であ

る。

¹⁷ 江戸叢書刊行会編纂『江戸叢書』巻の三(江戸叢書刊行会、大正五年)pp.117-8。

十方庵敬順(1762~1832)は、小日向水道端(文京区)の東本願寺派本法寺内の廓然寺の住職だったが、五十一歳で隠居した後、江戸郊外の名所古跡を遊覧した。著に『遊歴雑記』全五編がある——渡辺京二著『江戸という幻景』(弦書房、二〇〇四)p.247 参照。

¹⁸ 前掲『順礼物語』p.45 にも「……されば金沢八景の詩哥と号し。皆人^{もてあそび} 賞^{かなざは} び給へり。……金沢八景の詩哥^{しいか}。世に、かくれなし。」という。本書は寛永中版とあるから、禪師と居士の「金沢八景詩歌」よりも五六十年ほど前にはもう、この種の詩歌は人口に膾炙していたらしい。しかし、この「八景の詩哥」の内容は伝わっていない。後考をまつ。

¹⁹ 前掲『江戸叢書』p.118。

²⁰ 「総宜楼」は漢詩人たちが作詩の際に用いた雅称のようで、一般には「東屋」で通ったようだ。前掲『箱根／江島／鎌倉道中記』p.53 に十返舎一九がこの宿に遊んだ記述があるが、その注(11)に「東屋一はじめ総宜楼、のちに東屋」という間違った注記がなされている。それは「総宜楼」という唐名よりも、「東屋」という和名のほうが知名度の高かったことによる誤解であろう。じつを言えば、私も「東屋」と「総宜楼」が同一のものであることを知ったのは近年のことである。

²¹ 神奈川県立図書館蔵。出版年は不明だが、淡斎詩・詩仏書の「題金澤總宜樓」の詩碑が建てられた文政五年の冬以後のものであることは間違いない。

²² 『詩聖堂詩集』初編(文化六年刊)、二編(文政十一年)、三編(天保九年)。『詩集 日本漢詩』第八卷(汲古書院、昭和六十年)所収。

²³ 天保七年印行。池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第三卷(文会堂書店 大正十年)所収、p.57。

²⁴ 国立国会図書館蔵の写本『東陽先生詩鈔』巻三に「贈天民」、同巻五に「留別天民」という詩があるという。未見。揖斐高著『江戸詩歌論』(汲古書院、一九九八)所収『大窪詩仏年譜稿』p.692 参照。

²⁵ 江戸叢書刊行会編纂『江戸叢書 巻の六』(江戸叢書刊行会、大正五年)pp.226-7

²⁶ 本詩は詩仏の別集『詩聖堂詩集』初編下の巻九に収められている。文化七年刊。本詩の前に「将遊杉田宿神奈川」(七絶一首)「杉田村」(七絶二首)があり、後に「帰路再宿神奈川」(七絶一首)があるから、当時流行の杉田村観梅と八景探勝をかねた春郊を試みたのだろう。

この「郊行詩」連作の前に、「聞柏如亭登富士山宿石室中風雨三日比晴飢困甚矣終不能攀絶頂戯有此寄」という詩(七絶二首)がある。柏木如亭著『詩本草』の開巻劈頭の「粥」で有名な富士登山遭難事件であるが、これは文化五年(1808)の閏六月のことだから、「宿金沢総宜亭」は文化六年の初春、梅見時の作であるということが分かる。これらの詩は前掲『詩集 日本漢詩』第八卷 p.419 に収められている。

²⁷ 前掲『金沢八景』金沢文庫特別展図録、p.15。

²⁸ 同書 p.15。

²⁹ 桐生市図書館蔵『佐羽淡斎詩集』所収『淡斎百律』では、詩題は「金沢総宜亭」になっている。本詩は大窪詩仏の書を刻したものであるから、詩仏が改めたものと考えられる。

³⁰ 桐生市図書館蔵『佐羽淡斎詩集』所収『菁莪堂集』。(『淡斎三集』ともいう)

³¹ 渡辺崋山著『毛武遊記』、芳賀登編『渡辺崋山集』第二卷(日本図書センター、一九九九)所収、pp.8-27

³² 前掲『江戸叢書』巻の六、p.227。

³³ 同書 p.228。

³⁴ 前掲『箱根／江島／鎌倉道中記』p.53。他にも、神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編『神奈川県郷土資料集成』第十輯「絵草子篇」(神奈川県図書館協会 昭和五十八年)pp.65-128 に、十返舎一九作・歌川国安画^{かねのわらじ}『金草鞋江の島鎌倉紀行』(天保三年刊)の忠実な翻刻が収録されている。底本は「神奈川県立金沢文庫／石井光太郎(異版)」前書と後書には多少の異同があるが、引用は前書によった。

³⁵ 大庭柯公著『江戸団扇』(中央公論社、昭和六十三年)p.38。

³⁶ 同書 p.106。

³⁷ 前掲『江戸叢書』巻の六、pp.224-5。

³⁸ 前掲『金沢八景』金沢文庫特別展図録所収、p.78。

³⁹ 東屋の豪勢さに関する記事を二つ、後考のために『ヨコハマ文学散歩—金沢八景に近代文学を探る(第30回)』から転引しておきたい。(58. 10. 2 共催 横浜文芸懇話会／横浜市教育委員会) p.7。

5 東屋旧跡 洲崎町 80

旅館。『江戸名所図会』(天保7年[1863]刊)にも出てくる老舗。かつては、敷地 800 坪、2 階建て木造作り(延 200 坪)のほか庭園には池あり、離れ家があって樹木が茂り豪壮なものであったが、昭和 30 年に廃業。明治 20 年(1887)伊藤博文が憲法起草に際し、同館に投宿し想を練ったというゆかりの処。これを記念して昭和 15 年(1940)4 月「憲法草創之処」碑が同庭内に建てられた。現在、この記念碑は野島公園内に移建されている。

金沢八景

鏑木 清方

東屋はもと瀬戸橋の西岸にあったのが安政5年に類焼して、橋の東、現在のところに移った。この家の創業は知らないが、部屋に掲げた額面には、抱一の下画で原羊遊齋の蒔絵、水月のみごとな板額。窪俊満の額もあった。これらはこの家の格と歴史を語るものだが、ある年この辺一帯洪水があり、古い書翰に、釜利谷のへんより悪水流れ出で、とも云っているが、この水害にあたって、江戸山谷の八百善、深川の平清と、この東屋が名を列ね、江戸の客筋に助力を求めた書面の表装されたのも見た。この時代に格式を誇る八百善や平清が、名所だとはいえ、都をはなれたこの宿のために一肌脱いだということの心意気が偲ばれるのと、この土地が江戸人の間によく知られていたかが証拠立てられる。

詩人大窪詩仏、字天民。たいそうこの景勝を愛し、常に東屋に泊まったらしく詩仏の書いた「四時総宜之楼」の額が、私の往った時にも「江戸名所図会」の挿絵に見るのと同じように掛かっていた。その他にもこの人の筆になる詩画多く、庭には得意の竹の画を刻した石碑も立っていた。

その後も私は、ここに来てこの家に宿した文人墨客の手蹟を見た。亀田鵬齋と詩仏が多く、抱一、文晁のものもある。

東屋を著名にしたのは、ただ風流韻事にかかるばかりではなく、明治人にとっては、久しくその保護のもとにあった明治憲法に、忘れることの出来ない縁故を持っていたのである。

『続 こしかたの記』(昭和 42 年)

⁴⁰ 小林一好『上毛書家列伝』(上)みやま文庫、昭和五十九年、p.84。

⁴¹ 桐生市図書館蔵『佐波淡齋詩集』所収。

⁴² 前掲『渡辺崋山集』p.27。『毛武遊記』(天保二年刊)によると、「天保辛卯十月十一日卯刻起……十一月十二日戌刻の半過る頃、桐生の町に入る」とある(同書 p.4、p.15)。途中で駕籠に乗ってはいるが、江戸・桐生間は徒歩だと約二日の道のりである。

⁴³ 桐生市図書館蔵。

⁴⁴ 周骨平著『妙々奇談』(『日本随筆大成』第三期第十一巻、吉川弘文館、昭和五十二年)所収、p.367。(ルビ省略、「・」を補った)。なお『詩語碎金』、『宋詩語』の二書は江戸から明治にかけ、お手頃な初学者の参考書として普及したものである。

⁴⁵ 前掲『江戸詩歌論』所収「化政期の地方と中央—佐波淡齋を中心に—」p.292 参照。

⁴⁶ 佐原菊塙は北野屋平兵衛のこと、文化元年、向島に新花屋敷を開園。文化元年夏六月、『盛音集』を江戸書林須原屋から刊行。『詞華集 日本漢詩』第十巻(汲古書院、一九八四)所収、p.20-22 の解題参照。淡齋詩は同書 p.404。

⁴⁷ 菊塙が林和靖の影響を受けていたことについては、前島康彦著『向島百花園』(郷学舎、一九八一) p.34 に引かれた鞠塙著『梅屋花品』に、「孤山の処士和靖は梅三百六十株を植、標実を售て生活す。梅屋子も亦其跡を逐て隅田川の辺に荒田数百畝を買て、梅三百六十株を種、一株を以て一日の用となす」とある。また三百六十株については、齋藤彦磨著『神代余波』(『東京市史稿 遊園篇第二』(東京市役所、昭和四年)p.775)にも同様の記述がある。新梅屋敷については、前掲『遊歴雑記』三篇巻之上所収「貳拾貳 寺島本田新梅屋敷」参照。

⁴⁸ 「去年甲戌買後山而栽梅数百株今年乙亥花尽開喜賦」前掲『菁莪堂集』所収。文化十一年に植林した梅が翌文化十二年には全開したという。

⁴⁹ 棚橋正博著『江戸の道楽』(講談社、一九九九年)第一、二章。

⁵⁰ たとえば淡齋主人訳『通俗古今奇観』(文化十一年刊)。前掲『アカデミア紀要』創刊号 p.43 参照。

⁵¹ 前掲『江戸詩歌論』p.291 参照。

⁵² 佐波秀夫(淡斎の子孫)談『桐生の歴史を語る—佐波秀夫・卓話集』(桐生ロータリークラブ「桐生の歴史を聞く会」、平成二十二年)pp.14-5、pp.33-4。淡斎に関する先行研究のほとんどが、この逸話を紹介しているが、揖斐高氏によると、真偽のほどはさだかではないという(前掲『江戸詩歌論』pp.318-9 参照)

⁵³ 桐生織物史編纂会篇『桐生織物史人物伝』(桐生織物同業組合、昭和十年)p.33。

⁵⁴ 注 39 参照。

⁵⁵ 前掲『かねさは物語』p.170 参照。

⁵⁶ 小林一好著「佐波淡斎の『金沢詩碑』の所在について」桐生文化史談会編『桐生史苑』第 20 号(昭和五十六年)所収、p.74-77。『桐生市史』中巻(桐生市史刊行委員会、昭和三十四年)p.203 では、「金沢詩碑」は「金沢八景の某所に現存」と書いてあるばかりで、『市史』刊行の昭和三十四年の時点では行方不明になっていたようである。

⁵⁷ 前掲『鏑木清方文集／五 名所古跡』所収、p.241。この随筆は昭和二十七年三月に書かれたもの。

⁵⁸ 神奈川県立金沢文庫編『東海道中一寸寄～金沢八景～』(金沢文庫、平成十三年)、p.18。

⁵⁹ 東屋は海軍の追浜飛行場にほど近い。まだ調査はしていないが、このときの空襲の被害は金沢八景にも及んでいるはずである。たとえば前掲『かねさは物語』の口絵の説明によると、「金沢地方は、要塞帯内で、絶対に詳細な地図類の刊行は禁ぜられていたという。米軍爆撃機の恰好な空爆目標だったことは疑いをいれない。

⁶⁰ 桐生図書館蔵『佐羽淡斎詩集』所収。

⁶¹ 歌川広重『広重 武相名所旅絵日記』(原色図版 56 枚、原寸大複製。鹿島研究所出版会、昭和四十九年)の第九景「金沢道山中より海辺眺望」を見ると、かつて金沢道が山道であったことが分かる。また第十景「能見堂筆捨松より八景一覽」では、幕末の「セトハシ」「東屋」などを望むことができる。

⁶² 前掲『金沢八景』金沢文庫特別展図録 p.15。

⁶³ 前掲『日本詩話叢書』p.17。